

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

—ケニア・ナイロビ大学、ニャルワンダ語、H22. 8. 13-H22. 11. 12—

平成 22 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
近藤 有希子

自身の研究テーマについて

1990 年代のサブサハラ・アフリカでは深刻な武力紛争が頻発したが、ルワンダでも 1990~1994 年にかけて起きた内戦と虐殺の過程で多くの孤児が生み出された。また、ほかのアフリカ諸国と同様にルワンダにおける孤児は、HIV/AIDS によっても生み出されている。7-15 歳の子どもの 51.5%は、両親ないし一方の親がいないという報告もある。

ルワンダで私を受け入れてくれた「家族」も、夫を亡くし、自分の子を育て終わった高齢の女性が、エイズで両親や兄弟を失った孤児 3 人を引き取りって一緒に暮らしている人々であった。この「家族」の中で、老女と子どもたちが「家族」の境界をどう認識しているのかを、彼らの生活実践の分析を通して明らかにすることが本研究の目的である。ここで「家族の境界」とは、当事者が自らの価値や規範に依拠してどの人々までを「家族」の範囲に含めているのか、ということの意味している。ルワンダの孤児に対しては、国際機関や NGO が多くの援助を行っている。それに対して本研究では、ルワンダの人々自身による孤児の受け入れシステムを明らかにすることを通して、紛争後社会に生きる人々がいかに相互のケアを行っているのか、またそれにともない彼らの「家族」観がいかに変容しているのかを検討する。

また家族は決して「自然」なものではなく、国家の政策から影響を受けながらその枠組みが定められる側面を有する。その意味で、家族は「政治的な諸制度」のひとつとして考えることができよう。本研究では、紛争後社会において国家が「家族」をどう捉えているのか、また「家族」の側が国家をどのような存在として認識しているのかについても分析を進める。

研修言語の概要

ニャルワンダ語は、ニジェール・コンゴ語族、バントゥー語派、中央語群に属する言語である。主としてルワンダで話され、同国の公用語のひとつとなっている（ほかの公用語は、英語・フランス語）。話者は約 800 万人。ウガンダ南部やコンゴ民主共和国東部でも話される。ルワンダ語は隣国のブルンディの公用語であるルンディ語と、相互に理解可能な言葉である。

語学研修の内容について

現在の受け入れ先機関であるナイロビ大学アフリカ研究所では、ニャルワンダ語の講義は開講されていない。したがって、同研究所から紹介されたナイロビ市内の語学学校(Anglican Church of Kenya: ACK)でニャルワンダ語を学んだ。同語学学校にはケニア人のほかに、ヨーロッパやアジアの人々も主としてスワヒリ語を学びに、またソマリアやコンゴ民主共和国、ブルンディなどのアフリカ諸国の人々が英語を学びに来ている。私の研修期間の終わり頃には、ルワンダ国立大学の先生方もルワンダにおけるフランス語から英語化への変化に対応するため、40名近くが大挙してACKへ英語を学びに来ていた。

ニャルワンダ語は先生とのマンツーマンの授業であったため、先生の都合と折り合いをつけ、平日木曜日以外の午前中、60分の授業を2コマ受講していた。また1ヵ月に1回程度の頻度で先生の作成したテストが実施された。

語学研修の前半は、日本やケニアではニャルワンダ語の教科書が入手できなかったため、挨拶や簡単な会話表現を中心に、基本的な文法構造を学んでいた。研修期間中、一度ルワンダに行く機会を得たときに、現地の小学生が使う教科書を入手することができたが、後半ではその教科書を使って授業を進めてもらった。それに加えて、ルワンダに入ったときに自分が頻繁に使うであろう単語（たとえば農業関連の単語）や現地の文化に関する話（たとえば結婚について）を、トピックとして学んだ。



写真1: ACKの入口

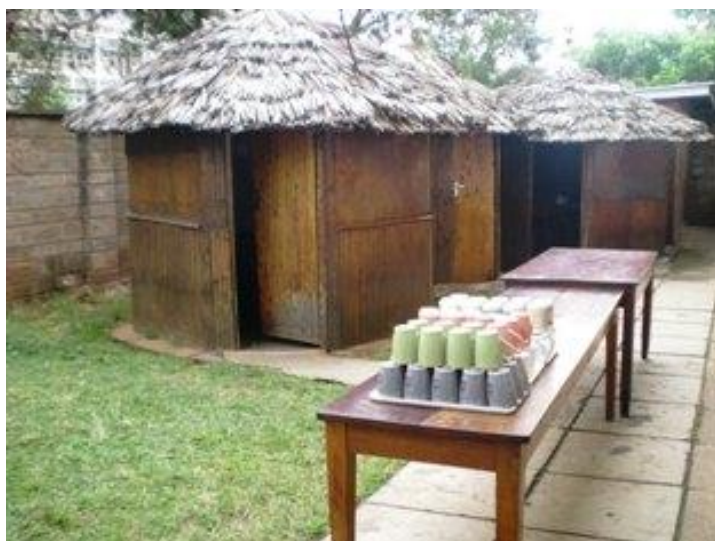


写真2: 授業のあった教室

研修期間中に印象に残った体験や経験

「有希子、ルワンダ人と日本人のだめなところは、あまり積極的にしゃべらないことだ。コンゴ人の先生を知っているだろう。彼はおしゃべり好きで明るくて、間違えることなんて怖れず相手と会話しようとする。だから10ヵ国語近くも話せるんだ。少しずつでいい。いつか有希子とニャルワンダ語で話せるのを楽しみにしているよ」

ある日、なかなか話せるようにならず、落ち込んでいた私に先生がかけてくれた言葉である。先生にとっては初めてのニャルワンダ語の生徒であり、彼自身、常に試行錯誤して授業を行っていたが、同時にいつも私の状態を察知して静かに言葉をかけてくれた。また私は彼を通して、ルワンダ人と日本人の共通点のようなものをいくつも垣間見た。それはルワンダで調査を行う、ひとつの大きなモチベーションとなっている。

そのほか、語学学校で出会った韓国やケニア、ブルンディの学生、帰りに毎日会う古着売りや警備員のケニアの人たちからもたくさんの言葉をもらい、総合的に人に恵まれた語学研修となった。



写真3：古着売りの友人たち

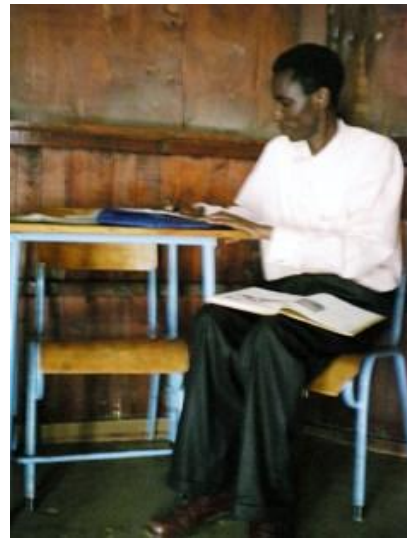


写真4：作文の添削をする先生

目標の達成度や反省点について

先生も私も必要以上にものを話すタイプではなかったため、授業は受け身で行われることが多かった。それではいけないと悩んでいたが、研修期間の最後2週間ほど前から、毎日ニャルワンダ語で作文を書き、添削してもらおうようにした。すると単語や表現の定着も早まり、もっと伝えたい、こんなときにはどう言うのだろう、という気持ちがつよくなった。最後の2週間でのニャルワンダ語の上達は大きかったように思う。

反省点としては、授業以外の場でルワンダ語を使う機会が少なかったことである。ナイロビには多くのルワンダ人がいるというが、そのような場へ積極的に足を運ぶことは少なかった。ニャルワンダ語には、たとえば否定形の作り方がいくつかあるのだが、現地では授業では習わなかった形がよく使われていた。ルワンダ渡航後、現地の人とどれだけ一緒にいるかが語学上達の鍵を握るという、ごく当たり前のことを再確認したため、今後の申し送りとしておきたい。